

中国のほんの話(64)

## 荒井健 『秋風鬼雨 詩に呪われた詩人たち』

～ ほんやくは恐ろしい ～

蔭山 達弥



「ほんやくは恐ろしい。自分でものを書くよりもさらに恐ろしい。わたし(荒井)は「詩」や「小説」を書いた経験はないけれども、自分の「創作」がいかに拙かろうと、その責めを全部自分で背負いこめる、この理屈だけはよく分かる。ほんやくはちがう。下手をすれば赤の他人に累を及ぼす。いや、下手をすればではなく、完全無欠なほんやくなど、まずありえぬ以上、下手上手にかかわらず原作者には何ほどかの迷惑をかける。作品が本来の価値をみとめられぬ可能性さえある。しかもその責めが訳者の方に負わされることは多くあるまい。」(荒井健『シャルパンティエの夢』朋友書店2003所収)

1931年、大阪に生まれ、京都大学で中国文学を学び、立命館大学講師であった1962年に『悲の器』で第一回文藝賞を受賞。以後、小説・評論に次々と力作を発表し、戦後文学の継承者として一時代を画した高橋和巳(たかはし かずみ、1931～1971)の遺作『詩人の運命 李商隠試論』を荒井健は手厳しく批評する。「かれの死後一年とたたぬ1972年4月、河出書房新社から「高橋和巳作品集」別巻として『詩人の運命 李商隠試論』(以下『詩論』と略す)が出たとき、もしかれに敵意を持つ人間が見たなら手を拍って喜びそうな本だな、というのがわたしの正直な感想だった。とにかく肝心の李商隠(812～858)すなわち李義山の作品がまともに読めていない。岩波書店版「中国詩人選集」の『李商隠』(1958年)よりも退歩しているとさえ思われた。「詩人選集」のばあいには、何と云っても吉川幸次郎と小川環樹、古典詩文の読みにかけては本場の中国へ出したって誰にもひけを取らぬ両大家に、ごく丁寧に眼を通してもらえた。大過のあるうはすがない。ところが『詩論』には、新米の学生あたりのやりそうなミスまである。」(荒井健『詩人の運命』再検討、『シャルパンティエの夢』所収)それから十二年後、岩波書店から「新版中国詩人選集」(全7冊)の第7回配本として、荒井健注の「李賀」と高橋和巳注の「李商隠」が一冊となって出たのは、運命のいたずらとしか言いようがない。

荒井健の一冊目の文集『秋風鬼雨 詩に呪われた詩人たち』の書名は李賀の『感諷』の詩(其の三)から取られた。「南山 何ぞ其れ悲しきや 鬼雨 空草に灑ぐ」(南山は、どうして、かくも悲しげなのだ。亡霊のむせび泣きは雨となり、人影もない草むらに降りそそぐ。

荒井健訳) 荒井は『詩と中国』の中で「李賀の世紀には実際すぐれた詩人が雲のごとくあらわれたが、なかでもかれに比肩できるのは、やはり二十歳ばかり後輩の李商隠のみだろう。李賀がほとんど近代詩人と見紛わんばかりの鋭い悲しみをのせる心情告白をなしたのに対し、李商隠は必ずしも肉声では語りたがらない。が、実生活ではおよそ不器用だったかれは、いったんことばの世界に移ると、魔術師的な手腕を見せる。」と述べている。(荒井健『秋風鬼雨 詩に呪われた詩人たち』筑摩書房1982所収)

荒井が担当した「中国詩人選集」14「李賀」の解説の冒頭は、荒井の李賀に対する並々ならぬ思い入れが伝わる名文である。「李賀(791～817)は二十七歳で死んだ。中国は詩の王国だけれども、花火のように。一瞬のきらめきと共に、いっさいを燃焼し尽くして倒れる型の詩人はまれなのだ。李賀は「鬼才」と呼ばれた。この言葉は、かれの為にできた。他の文学者をさすことは、中国においては、ない。鬼は日本語のオニとはちがひ、死者、すなわち亡霊を意味する。鬼才とは、幽霊や妖怪など超自然の事物によって、鬼気せまる神秘的な雰囲気をかもし出す異常感覚者をさす。(中略)死せる美女に対する思慕の念にあふれる「蘇小の歌」、真夜中の墓場をえがく「感諷(其の三)」、さまざまな化け物の現れる「神絃曲」等を見よ。そこには極度にロマンチックな幻想の世界が展開される。元来、中国の文学は、夢幻的なイメージの創造を得意とはしない。詩も、大半は日常のありふれた経験をテーマとし、その傾向は時代が下がるにつれて次第に強まる。かれ(李賀)は中国文学史上孤立した詩人と見なしてよい。」

「幽蘭の露 啼ける眼の如し」(しのびやかに美しい蘭の露は、涙を浮べた彼女の眼。『蘇小の歌』荒井健訳、蘇小は五世紀末頃、いまの杭州市にいたという有名な歌姫)

かげやま たつや(教授・中国文学)